

介護実習Ⅲ終了後における学生の満足度を高める要因

－実習指導者と担当教員の役割－

棚田 裕二*・松本 百合美

新見公立短期大学地域福祉学科

(2014年11月19日受理)

学生が充実し満足できる実習を送るために必要な実習指導者や担当教員の役割を考察することを目的とし、介護実習Ⅲ終了後の学生に対して、実習の満足度に関するアンケートを実施した。その結果、9割以上の学生が実習全体として満足していると答えた。その要因として、実習指導者と担当教員の“介護技術に対する助言・指導”や“総合的な相談と精神的支援”、“介護計画への助言・指導”が挙げられていた反面、実習指導者および施設職員、担当教員の“指導方法の違い”などに戸惑いを感じていた。また、実習施設に関しては“利用者への対応”や“実習生への対応”に対しても戸惑いを感じており、担当教員は実習指導者とともにその戸惑いに関して適切に対応していく必要がある。そのためには、実習指導者と担当教員の連携は必須であり、情報の共有化と、一緒に学生を教育していく姿勢を持つことで、学生はさらに良い学びを深めることができると考える。

(キーワード) 介護実習, 学生, 実習指導者, 担当教員

はじめに

2008年の『社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直し』¹⁾以降、実習施設・事業等の区分が実習施設・事業等(Ⅰ)と実習施設・事業等(Ⅱ)に分けられた。A短期大学においては、それぞれを実習Ⅰと実習Ⅱとして位置づけ、実習を行っている。実習Ⅰでは介護体験実習①・②(1年前期:介護実習Ⅰに含む2日間)と介護実習Ⅳ(2年次後期:5日間(居宅実習))に分けられている。実習Ⅱでは介護実習Ⅰ(1年次後期:2週間)と介護実習Ⅱ(2年次前期:4週間)、介護実習Ⅲ(2年次後期:4週間)に分けられている。各実習段階に関する目的と目標を介護実習の手引きの中で明確に記し、担当教員は学生に対して助言・指導を行っている。また実習前に学生は介護に関する知識・技術の講義や演習を受講している。実習において担当教員は学生が学んだことを活かすことができるように支援している。

本稿では介護実習Ⅲ終了後の学生に対して、実習の満足度に関するアンケートを実施し、学生が充実し満足できる実習を送るために必要な実習指導者や担当教員の役割を考察することを目的とする。

Ⅰ 研究方法

1. 調査対象

A短期大学介護福祉士養成学科(2年制課程)における2年次生48名(2012年度入学)のうち、アンケート調査への回答が得られた34名(回収率70.8%)を調査対象とした。対象者は1年後期に介護実習Ⅰ、2年前期に介護実習Ⅱを実施し、それぞれに対して実習指導を受けてきた。また、学校で介護に関する講義と演習はすべて受講している。

2. 調査時期

2013年10月21日から同年11月23日に実施した介護実習Ⅲにおける実習終了後の事後指導の際に調査を実施した。

3. 調査方法

調査対象には選択肢によるアンケートと自由記述によるアンケートの2種類の質問紙を配布し調査を行った。選択肢によるアンケートの内容は、①実習全体として、②利用者との人間関係、③学生同士の人間関係、④実習先の指導者の指導や助言の内容、⑤実習先の指導者の接し方(態度や言動など)、⑥実習先の職員の指導や助言の内容、⑦実習先の職員の接し方(態度や言動など)、⑧担当教員の指導や助言の内容、⑨担当教員の接し方(態度や言動など)、⑩実習生自身の学習の成果、⑪実習生自身の人

*連絡先: 棚田裕二 新見公立短期大学地域福祉学科 718-8585 新見市西方1263-2

間的成長の11項目とした。各質問項目の満足度を「大変満足」、「まあまあ満足」、「やや不満」、「大変不満」の4件法で選択してもらうようにした。自由記述に関しては、「実習指導者や施設職員の指導や助言でプラスになったこと・マイナスになったこと」と「担当教員の指導や助言でプラスになったこと・マイナスになったこと」、「担当教員の実習巡回指導や帰校日指導^{※1)}について」、「その他満足度に影響したこと」について記述してもらうようにした。

4. 分析方法

満足度に関する質問について「大変満足」を4点とし、以下「まあまあ満足」を3点、「やや不満」を2点、「大変不満」を1点とし単純集計を行った。自由記述についてはKJ法を用いて整理した。

5. 倫理的配慮

調査を依頼する際は、調査の依頼と説明を口頭で行った。さらにアンケートは無記名で行い、個人が特定されることはないこと、データは本研究以外では使用しないこと、アンケート用紙は使用後に責任を持って処分することを説明した。

II 結果

1. 実習における満足度

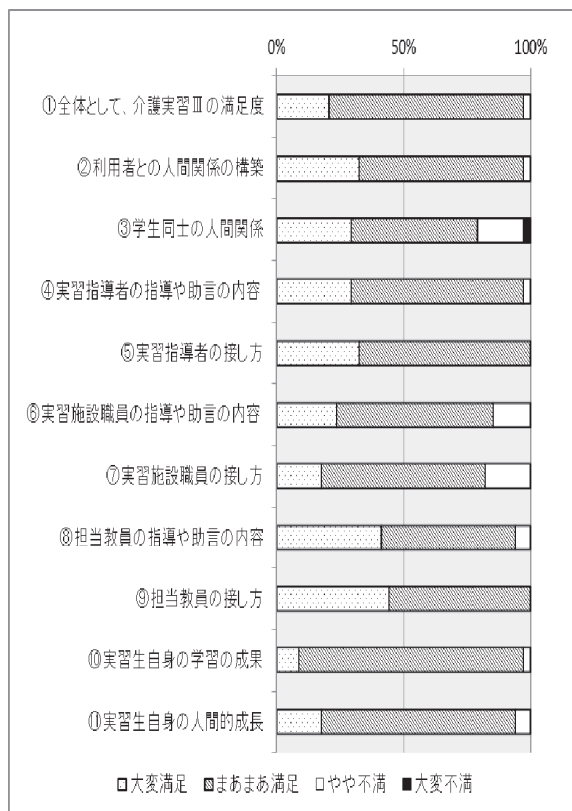


図1 介護実習Ⅲ終了後の学生の実習満足度

学生は介護実習Ⅲ全体としての満足度は高く、大変満足が20.6%とまあまあ満足が76.5%でほとんどの学生が満足していると回答した。その他各項目に関して満足度が高かった順に⑤実習先の指導者の接し方(態度や言動など)と⑨担当教員の接し方(態度や言動など)が全員満足していると回答した。次に②利用者との人間関係と④実習先の指導者の指導や助言の内容、⑩実習生自身の学習の成果が97.1%であった。以下順に、⑧担当教員の指導や助言の内容と⑪実習生自身の人間的成長が94.1%、⑥実習先の職員の指導や助言の内容が85.3%、⑦実習先の職員の接し方(態度や言動など)が82.4%であった。もっとも満足度が低かったのが③学生同士の人間関係が79.4%と唯一8割を切る結果となった(図1)。

2. 満足・不満の要因について(自由記述)

自由記述の各項目に対しての意見をKJ法の手法を参考にしながら、以下の手順でカテゴリー化し、各カテゴリーの人数を整理した。

1) 実習指導者や職員の指導や助言でプラスになったこと(回答数33名)

「学校で習った基本的な技術以外にも利用者に合わせた応用的な技術を指導してもらった」や「腰を痛めないような介護の方法を指導してもらった」、「学校で習ったことだけではわからない服の着せ方など丁寧に教えてもらった」などの意見をまとめ、「介護技術に対する助言・指導」のカテゴリーとした。「アセスメントの際に実習時間内に収集できない情報を提供してもらえた」や「ケアプランの実行に対して、様々なことを実施させてもらえた」、「計画立案の際の助言、実践に協力してもらえた」などの意見をまとめ、「介護計画への助言・指導」のカテゴリーとした。「その日の実習終了後に反省会が設けられ相談の機会があった」や「困っていることや悩みなどを聞いてもらった」などの意見をまとめ、「総合的な相談と精神的支援」のカテゴリーとした。「実習施設内だけでなく外出などの機会があった」や「受持ち利用者との時間調整、多くの介護場面を経験させてもらえた」などの意見をまとめ、「実習内容の調整」のカテゴリーとした。以上、4つのカテゴリーが抽出され、意見の多かった順に「介護技術に対する助言・指導」(12名)、「介護計画への助言・指導」(10名)、「総合的な相談と精神的支援」(9名)、「実習内容の調整」(7名)であった。

2) 実習指導者や施設職員の指導や助言でマイナスになったこと(回答数22名)

「以前に指導を受けた方法で実施していると他の施設職員より異なる指摘を受け戸惑った」や「場合によっては学生が施設職員によってやり方を変えなければならなかった」などの意見をまとめ、「職員ごとの指導方法の違い」のカテゴリーとした。「利用者に対する態度・言動に度を越す場面があり、対応に困った」や「言葉づかいがとてき

ツかったり、利用者への対応が厳しかったりする場面をみることで戸惑った」などの意見をまとめ、「利用者への対応」の категорияとした。「学生が行いたいことがなかなかさせてもらえなかった」や「あまり指導をしてもらえなかった」、「記録物に対して嫌な顔をする」などの意見をまとめ、「実習生への対応」の categoriaとした。不満の内容は、実習指導者以外の施設職員に対してのものであった。以上、3つの categoriaが抽出され、意見の多かった順に「職員ごとの指導方法の違い」(8名)、「利用者への対応」(7名)、「実習生への対応」(7名)であった。

3) 担当教員の指導や助言でプラスになったこと(回答数31名)

「ケアプランの修正時に、全体の方向性や具体的なケア方法のアドバイスを丁寧に指導して下さり、考えやすかった」や「書いている事に対して、何が必要なことか助言してもらった事により見落としていた所を知ることができた」などの意見をまとめ、「介護計画への助言・指導」の categoriaとした。「実習中に困ったことがあったときに相談ができた」や「体調への気遣い、労いの言葉をかけてもらうことで精神的な支えとなった」などの意見をまとめ、「総合的な相談と精神的支援」の categoriaとした。以上、2つの categoriaが抽出され、意見の多かった順に「介護計画への助言・指導」(18名)、「総合的な相談と精神的支援」(15名)であった。

4) 担当教員の指導や助言でマイナスになったこと(回答数6名)

「カンファレンス時に教員の質問内容が分からなかった」や「自分が望んでいる回答が得られなかった」、「記録面に関して指導をしてほしい」などの意見をまとめ、「指導不足」の categoriaとした。「以前の担当教員より受けた指導内容と違うことで戸惑った」や「先生によって記録物の書き方などの指導に違いがある」などの意見をまとめ、「教員ごとの指導方法の違い」の categoriaとした。以上、2つの categoriaが抽出され、意見が多かった順に「指導不足」(4名)、「教員ごとの指導方法の違い」(2名)であった。

5) 担当教員の実習巡回指導や帰校日指導について(回答数15名)

「施設では言えないこともあるので帰校日に話を聞いてもらえるような時間をつくってほしい」や「記録やケアプランの指導以外にも、心理面のことを相談できる時間がほしい」、「実習メンバーの前で実習メンバーについての相談はしにくいので、場所もできれば考慮してほしい」などの意見をまとめ、「個別적인指導」の categoriaとした。「帰校日に介護計画が進んでいる人は時間が余りやる事が少ない」や「巡回指導の日が週の半ばにあると介護計画があまり進んでいない」などの意見をまとめ、「巡回指導・帰校日の日程と内容」の categoriaとした。以上、2

つの categoriaが抽出され、意見の多かった順に「個別적인指導」(9名)、「巡回指導・帰校日の日程と内容」(5名)であった。

6) その他満足度に影響したことについて(回答数14名)

「施設内だけでなく、外出など施設外でも体験ができた」や「利用者とのコミュニケーションの時間が調整されていた」、「介護実習Ⅰ・Ⅱとは異なった種類の施設で実習を体験できた」などの意見をまとめ、「実習内容の充実」の categoriaとした。「学校では学ぶことができなかったことを体験できた」や「実習当初ではできなかった介護技術ができるようになった」、「利用者の状態に合わせた介護技術の応用を学ぶことができた」、「実習指導者や職員、担当教員の丁寧な指導により利用者との良い人間関係が築けるようになった」などの意見をまとめ、「成長の実感」の categoriaとした。「実習メンバーも優しく、話を聞いて楽しかった」や「施設へ泊まることは負担となった」などの意見をまとめ、「学生同士の人間関係」の categoriaとした。以上、3つの categoriaが抽出され、意見の多かった順に「実習内容の充実」(7名)、「成長の実感」(5名)、「学生同士の人間関係」(2名)であった。

Ⅲ 考察

1. 実習指導者および施設職員の言動が満足度へ及ぼす影響と担当教員の役割について

自由記述を整理した結果より「介護技術に対する助言・指導」と「介護計画への助言・指導」、「総合的な相談と精神的支援」、「実習内容の調整」の4つの categoriaを抽出した。尾台らは実習のやりやすさに影響を与えるものは『介護技術を細かに指導してもらえる』ことであり、職員の雰囲気や丁寧な指導が影響していること、学内の学びが技術習得には役立つことが大切であると述べている²⁾。学生は介護実習Ⅰ・Ⅱを経験しているとはいえ、毎回実習施設は変わり、介護実習Ⅲにおいても緊張し不安を抱えていたことが推測できる。実習指導者を中心に学生が学びやすい環境を整備することで、安心した状態で学びを深められることが重要である。

しかしながら、その反面でマイナスになった要因として挙げられていたことが「職員ごとの指導方法の違い」や「利用者への対応」、「実習生への対応」である。学生は学校で学んだ知識・技術とのギャップを感じながらも、少しでも実習で活かすことができるように努めている。その中で施設職員ごとによって指導内容が違うことは大きな戸惑いを生んでいた。川上は施設職員の利用者に対する暴言や職員間で介護方法等が統一されていないことが、学生は理論と実践のズレを感じ、意欲の低下につながると指摘している³⁾。

また本研究で明らかになったように学生が行いたいこ

とをなかなかやらせてもらえなかったことやあまり指導がなかったこと、記録物に対して嫌な顔をするなどを不満に感じていた。施設職員は通常の業務に加え学生の対応もあり、「大変だ」や「忙しい」と感じている職員も少なからずいると思われる。川上は施設職員の学生に対する面倒くさそうな態度や冷たい態度が心理的(情緒的)な問題から学習意欲の低下につながると指摘している³⁾。そこで、積極的な実習を行うためには施設職員との関係構築を円滑に行うことが必要であり、それを調整する者が実習指導者といえる。関係が構築されることで、介護技術などの助言・指導が充実したものになると推測できる。その他、通常週一回行っている実習先でのカンファレンスへ可能な限り施設職員にも参加してもらい、話し合う場を作ることも大切であると考えられる。先行研究においても話し合いの場を作ることが有効であると考えられている⁴⁾。

さらに学生自身が実習指導者を含め施設職員へ言えないことや悩んでいることを、担当教員は早期に察知し気づくことが求められる。その気づいた悩みに対して適切な判断を行い、実習指導者へつなげる役割を担っている。具体的には巡回指導のカンファレンスの際に担当教員が学生の代弁者となり、学生の悩みなどを伝えることも有効である。カンファレンス時に伝えることが不適切な場合は、直接実習指導者との面談の時間を設けるなどの措置も必要である。直接意見交換を交わしながら学生の悩みなどに対してどのように解決したら良いのかなど実習指導者と担当教員の役割を明確にすることで、学生は安心し充実した実習が送ることができると考える。

2. 担当教員の言動が満足度へ及ぼす影響と担当教員の役割について

A 短期大学の介護実習は月曜日に実習先へ行き、その週の土曜日まで泊まりながら実習することが多い。そのため学生は身体的にも精神的にも大きなストレスを感じている。その中で週一回の担当教員の巡回指導は自由記述の結果から気分転換となっていることが推測できる。巡回指導の際実習に関する相談はもちろんのこと、その他の相談を受けることも多々あった。古川は学生は教員の巡回指導に対して、安心して悩みや愚痴を言える相談相手、すなわち『息抜き』としての要素と学習を進める上での『協力者』としての要素を強く求めていると述べている⁴⁾。すなわち担当教員は教育的支援とともに精神的支援の役割も必要となってくる。巡回指導や帰校日の際には記録物や実習内容の指導や助言だけでなく、可能な限り個室を利用しその他の悩みや相談事を聞く機会を設けることも必要である。安心して相談ができる環境を整備することが求められる。

また介護過程の展開において学生は学校で事例を通して学んでいるが、目の前の利用者に関するアセスメントが上手いかわからない、ニーズが把握できない、どのような

計画を立てれば良いのか分からないなど悩んでいた。横山は介護過程の展開をはじめとした知識・技術の不足に起因する不安が学生の学びの大きな妨げになると指摘している⁵⁾。そのため担当教員は適切に助言・指導をしなければならない。しかしながら担当教員が行う巡回指導は週1回程度であるため、実習指導者の指導も必要となる。実習指導者が適切に介護過程に関して指導ができるように養成校が中心となって研修会を開催し、定期的に学ぶ機会を提供する必要がある。そうすることで実習指導者や施設職員だけでなく担当教員もより統一された質の高い指導ができ、学生が不満として挙げていた指導内容の違いについても改善できると考える。

3. 実習指導者と担当教員との連携の必要性について

前述のとおり学生が充実した実習を送るためには、実習指導者と担当教員の役割は大きい。しかしながら実習指導者は日々の業務に加えての学生の対応であり、また担当教員に関しては担当施設を数か所担当していることが多い。そのため双方にとって個々の学生に関わる時間は少なくなってしまう。そのような中で求められることが実習指導者と担当教員との連携である。尾台らは実習における到達目標を共有することが大切であり、できるだけ指導者と教員間で学生が実習をやりやすくしていく努力をしていく必要があると指摘している²⁾。また占部らは実習指導者と担当教員が密に連絡を取り合い、サポート体制を継続するような実習と教育現場の相互的な実習支援体制の確立が不可欠であると指摘している⁶⁾。

以上のことから充実した実習を送るためには事前に実習内容や実習目標を確認し、学生や養成校の実情と実習施設の実情を双方に確認し合うことが必要である。A 短期大学では毎年実習指導者会議^{注2)}を開いているが、実習指導者は業務の都合上全ての施設が出席できていない。出席者に対しても実習の大きな枠組みや流れ、養成校の現状を伝える程度となっている。その他会議以外に各実習前に実習指導者との打ち合わせを行なっているが、十分な時間が取れないことも多い。このような実情を踏まえて、まずは実習指導者会議を有効に活用しなければならない。会議の際には実習施設の担当教員を明確にし、担当教員を中心に、グループワークなどを通して意見交換をすることが重要であると考えられる。次に会議へ参加できなかった実習指導者に対しては、引き続き個別に対応し、事前に意見交換を重ねていく必要がある。統一した指導を目指した取り組みが求められる。

4. 今後の課題

学生の実習に対する満足度は、実習指導者および施設職員、担当教員の言動に大きく反映されることが分かった。充実し効果的な実習を送るために、実習指導者と担当教員の連携は必須であり、個々に重要な役割を担っている。しかしながら、本研究では介護実習Ⅲ終了後の学

生に対してのみ行ったものであり、介護実習Ⅰから介護実習Ⅱで、また介護実習Ⅱから介護実習Ⅲでどのように満足度が変わっていくかによってさらなる検討が必要である。その満足度の変化によって段階ごとの指導方法も変わってくるのが推測される。引き続き、学生に対して講義や演習を通して知識・技術を教育し、それを実習で活かすことによって、充実した学びを深めることができるよう、教員としての在り方を考えていきたい。

注

- 1) 帰校日指導：実習期間中の定められた日に、学生は学校へ登校し、実習に関する指導を担当教員より受ける。指導内容は主に実習の記録物に関する事、実習内容等に関する相談、その他実習に関する指導および相談を行なっている。介護実習Ⅰでは2週目の月曜日および介護実習Ⅱ・Ⅲでは2週目と3週目の月曜日に実施している。
- 2) 実習指導者会議：A 短期大学にて年に一度、これから実習を受けていただく施設関係（通所サービス事業所や訪問介護事業所も含む）の実習指導者に対して、実習についての説明と注意事項などを説明する会議である。その際に実習に関する意見交換や研修を実施している。

文献

- 1) 厚生労働省：社会福祉士及び介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて、[On line:http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index.html, 2014年8月31日アクセス]
- 2) 尾台安子, 赤沢昌子, 丸山順子：介護過程展開における実習課題の達成度と実習の充実感との関係. 松本短期大学研究紀要, 23, 21-29, 2014.
- 3) 川上道子：介護実習における経験と意欲に関する研究(1), 中国短期大学紀要, 31, 151-157, 2000.
- 4) 古川和稔：学生の「語り」に着目した実習指導法, 介護福祉学, 14(2), 196-202, 2007
- 5) 横山さつき：介護実習における学生の不安に関する因子分析的研修. 中部学院大学・中部学院短期大学部研究紀要, 9, 125-133, 2008.
- 6) 占部尊士, 村岡則子, 森永佳江, 大原朋子：介護福祉実習における実習生への心理的变化に関する研究, 長崎ウエスレヤン大学現代社会学部紀要, 10(1), 71-78, 2012.